

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



善行錄 上

栗原滿啓輯録

武州河越善行録

製本所 萬笈堂

698
母

河越善行録序

竊意に能く書具此流を知たものは其果了
智阿の所必る能く敏行の美を思ふものは其志
に仁ある所必る里柳昔堯帝の時舜の德行既
其年を以て復亦然矣其時に而て詩書を以て
唯其志の仁あるを以て即入典從一里何必詩書
禮樂に熟して後仁了るんやその父頑母嚚
象傲小して克く諱ふに孝を以て信ふ是の詩也

恭に——其行也致に世にハ將に美を——これを
得んや今也川裁邑の満成齋七十九歳既子
葦編三絶織燭三折に——昔の跡を述に其
男博ハ序を余に請ふて曰吾父已老矣古者老
教事をうへりこれと恥つて預け世書速に國文
に讀しめん事を欲せしけし一云の孝志暫そ——
而し書を捉て見れり川裁官下は孝悌忠信
の氏二十有條人其力行諄に教ふるも史孝悌は

一云

好生の徳也好生の徳民心に洽ふ世書成徳む人
嘗て怪するんや誠小波敏行を知りてその満成齋
なるを觀る人猶香臭れ滋を知りてよく誰れ其
節を励ました——何為哉

文政二卯年八月

家上徳内

河越善行錄跋

人君之治民夏謂之蒲盧周謂
之政蒲盧即土蜂之別稱以能
化名之政即心之明訓以能正稱
之人君自明明德以能化其民此
之謂蒲盧也自正其身然後能
正其民此之謂政也故君賢明於
上然後民化正於下矣苟君不賢

明則民不能得而善也今河越鄉
黨之民率善而孝子忠良甚多
者以賢君在上故也醒山翁亦其
民也翁之為人清廉慈恤邀拔乎
衆愛善之心最深矣乃患夫孝
子忠良之名朽而欲為之傳忘
勞不厭苦遠問通求遂得其記
三十有餘條矣乃欣然而感之夕

脩章句以成文朝執筆以書之
取以成編分以為三卷題曰河越
善行錄頌壯者以上本使孝子忠
良之子不行愛善之心不亦最
深矣乎且此書行於海內則能
使天下後世感興焉公羽之功豈
不大矣乎其子讓畔稱之而亦已
曰我翁八句而有此事使余作

跋焉余喟然嘆曰嗚呼至矣哉德
化之道也 君賢則民善矣父良
則子孝矣我親見之矣至矣哉
德化之道也人君之治民其舍之
何據焉二代所以名滿虛稱政之
意其在乎斯與其在于斯與
文政庚辰夏六月

河越

樂水堂道意撰



二
市
四

川越善行録自序

夫父母ハ吾生ヲ奉ルシテ其恩輝猶天
地ノ大トシ故リ人オシテ孝道ヲ務行
寸んモ有遍ラズ然ルニトモ世乃人
氣質ノ各々シク一ツゴトシテ物欲
カハズシテ或レ倫理ルカキキトモ動
カズルハ不孝者罪リ陷ルモ豈嘆シ
堪ルトモ安ラズヤ

とるる文化文政よるる忠孝乃聞え
數輩阿るる少いとも書籍のうらみ見
えされと歎らるる世に湮滅しる知
人せしむん事乎僕是れ悲むと茲に
年阿るる遂に已るると之を以て國民
能傳乎輯録せし尔凡三十有餘人を
得るる題して川越善行録とす
此書と觀て感動す人も阿るるを

忠孝と世ふ弘毅乃一助とやふらん
僕素とつる不學ふして文の拙き如く
南に在り認誤業亦鮮うらむらむし
高覽能諸君これ乎見赦し給へ
只忠孝いみじき名に幸よ世よ
朽ぶらん事乎欲せ云事しる
り

文政二年己卯秋

七十九夜醒山栗原滿成識



武洲川越善行録卷上目錄

桶屋伊右衛門才子長八

寺井岩熱之米

沖屋右衛門下男七之唐

迎江屋守右衛門

武洲川越善行録卷上

川越 栗原滿啓集録

桶屋伊右衛門才子長八

五笑町桶屋伊右衛門才子の家の長八とて才子を人

河屋生を吉田村権太夫の子とて十二三歳乃時よりかへ

ける志りに伊右衛門の近年病身となり桶屋の細工も

長八を人としてげける伊右衛門半ハ平生受ける

かゝる者より少くも酒のうへをれをさあへるを上桶造る

業もやあひゆるゆるゆゑ酒まゝ日をおとすを碎てるを

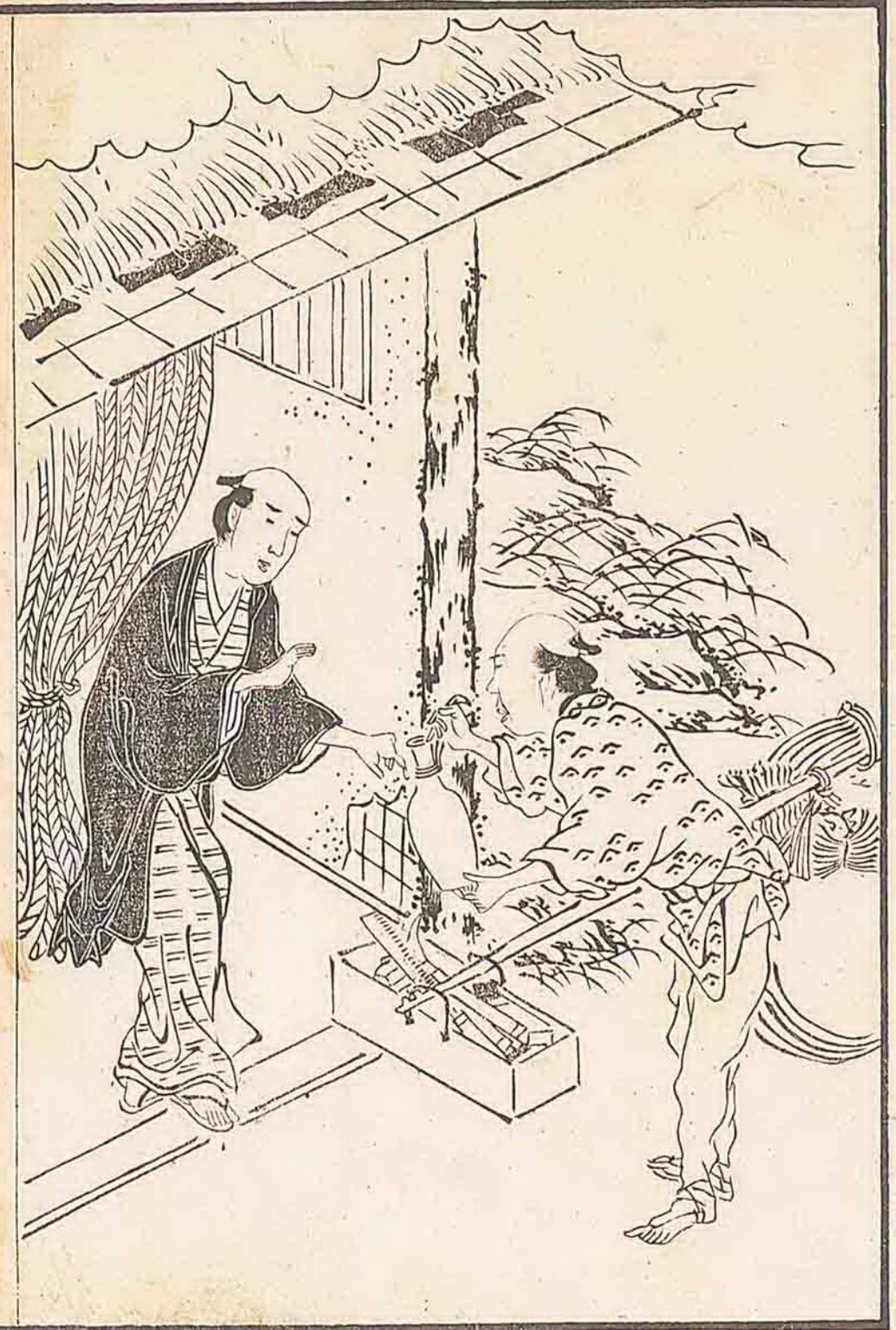
あ〜〜親類正所の妻も〜とみまを〜とさんぬるは月中
 父孫を諸姉當せりその折〜長ハ中けるヤ〜
 職分の師とたのみ妹は幼少のころより侍志〜とみ
 何さう〜び思はらげ〜家父よ〜を何國までもは
 侍り家職をたごみ侍り後やもあともなをねん百つれ
 のさたま〜と中られ侍ち侍つが〜そのころ後〜ハかど
 けれ〜ゆ〜とせと今父親の勤を世に我父それバ
 ぞ〜衆の〜が〜〜汝ハ家父と〜年光〜父母以
 ち〜だ〜れ〜す〜い〜と〜き〜バ〜も〜ハ〜ま〜し〜や〜り〜法〜老〜人〜を〜家

上ノニ

登補も〜と〜あ〜も〜は〜ん〜が〜け〜ん〜侍〜れ〜バ〜も〜と〜見
 つ〜ぎ〜ゆ〜も〜及〜ぶ〜中〜侍〜〜〜と〜若〜あ〜り〜は〜を〜人〜の〜半〜ハ〜中〜
 西翁才その〜と〜あ〜ゆ〜も〜は〜る〜自〜由〜に〜女〜を〜今〜と〜り〜の〜ち〜何〜を〜以
 う〜を〜日〜を〜お〜ろ〜れ〜布〜と〜し〜れ〜〜〜自〜別〜き〜〜道〜々〜箱〜を〜ら
 有〜い〜て〜伊〜太〜衛〜つ〜より〜さ〜ね〜し〜出〜け〜る〜叔〜伊〜太〜衛〜の〜り〜を〜川
 紙を辭れ志らぬの人と〜る〜の〜侍〜は〜〜〜我〜は〜〜〜け
 長ハも〜も〜に〜お〜ら〜つ〜武〜日〜と〜せ〜り〜あ〜ら〜は〜の〜と〜と〜料〜を〜あ〜て
 伊太衛をやりれい〜と〜あ〜ら〜は〜る〜長ハ衣袴〜も〜も〜着
 ぬ〜ら〜ま〜し〜お〜て〜烟〜草〜の〜む〜し〜より〜を〜ら〜る〜何〜も〜も〜身〜を〜に〜つ〜け

中さび細工も相恋よりけりける早みやげとて伊太衛つか
 好る酒をととのへ多づきかりける伊太衛の酒よ後とびり
 け有極を足る人すむと長ハがよき小なうりめぐるかり
 んよ志うさる年こいのうてさよかきて長ハハ年とし月つき拔
 るるといへども義人金石のごとくまうも点ちりび伊太衛を
 んごとみ折かりる酒もそのしき先ける志うるに吉田村
 の父権太衛ちけんたゑ己この株葉月くわがはつきの泣なみあまうひて流ながるお邊のべの
 中つゆ消こえとそり長ハもあぐも悲かなしむといへどもせんさ
 なくお邊のべのおと里さとそあうよとれかくて権太衛ちけんたゑの泣なみ

上ノ三



相續の半親類より母人をとりめ相談しける
又男子あれば日をすしそ長八父の名権右衛門を改め
母人妹あんと長育のり農業をなげ百姓をつむ
産きよにお禮さしけり志くれば伴右衛門を
そしけりける去程長八は伊右衛門半
もやれおのれえ控あむくもいれ行末い
もんとそながし是より船と乾益のるを耕作
がみ費は桶の細工を出情この價をほを
月毎は目費文或を費ふ百文づ毎月伊右

かこむははらうて能をふせをけりけるけ始末
天道の御恵みいらどく國の政府は
免され村長たる者一法をけりふも八が実行
かざりけきバもハ末若手と賜てその忠誠を
磨賞し終りし時寛延四年未六月十六日の事
ありき

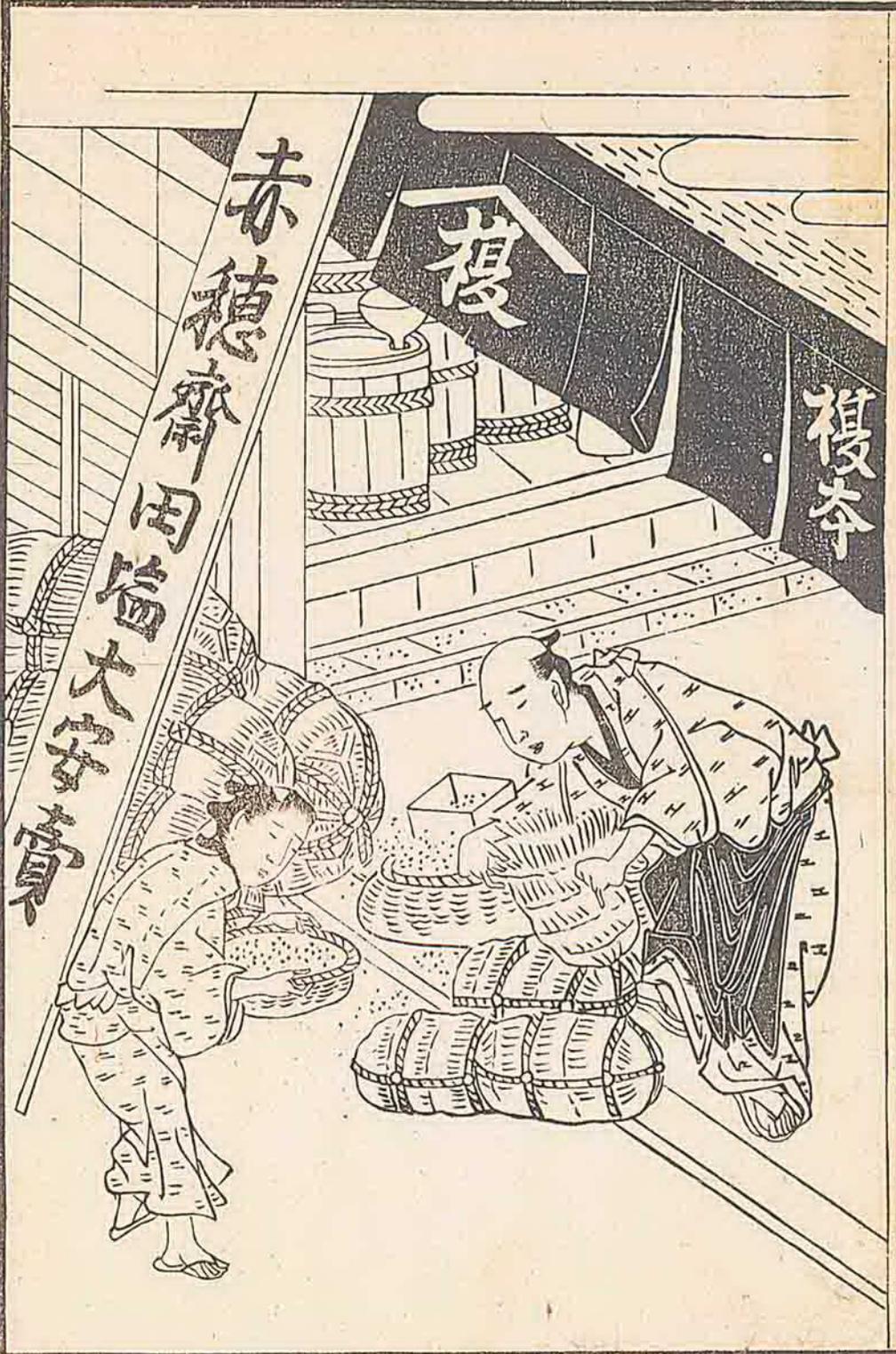
寺井宿惣々傳

川越市城下町はさき井宿といふ所は表右衛門と
田畑十はふ石をる百姓ありは者もれつて伊右

志す百姓衛生にも務め候へば近所の人も
 佛と申さんまへへて耕作の業も出候へ
 へりけるを在りて四十六七歳乃ち在りて
 即して後ふをせりてせよりけ首熱き候もやう
 十二日申すておされをたらかりも在りて
 の養育農業かへてさへ清くまゑやうやう
 やへおされふをのめ抱農業も手傳ひを
 月をぞ送るけり志するに在りて病気のやま
 病となり候へば悩むることおほく百姓の
 上ノ五

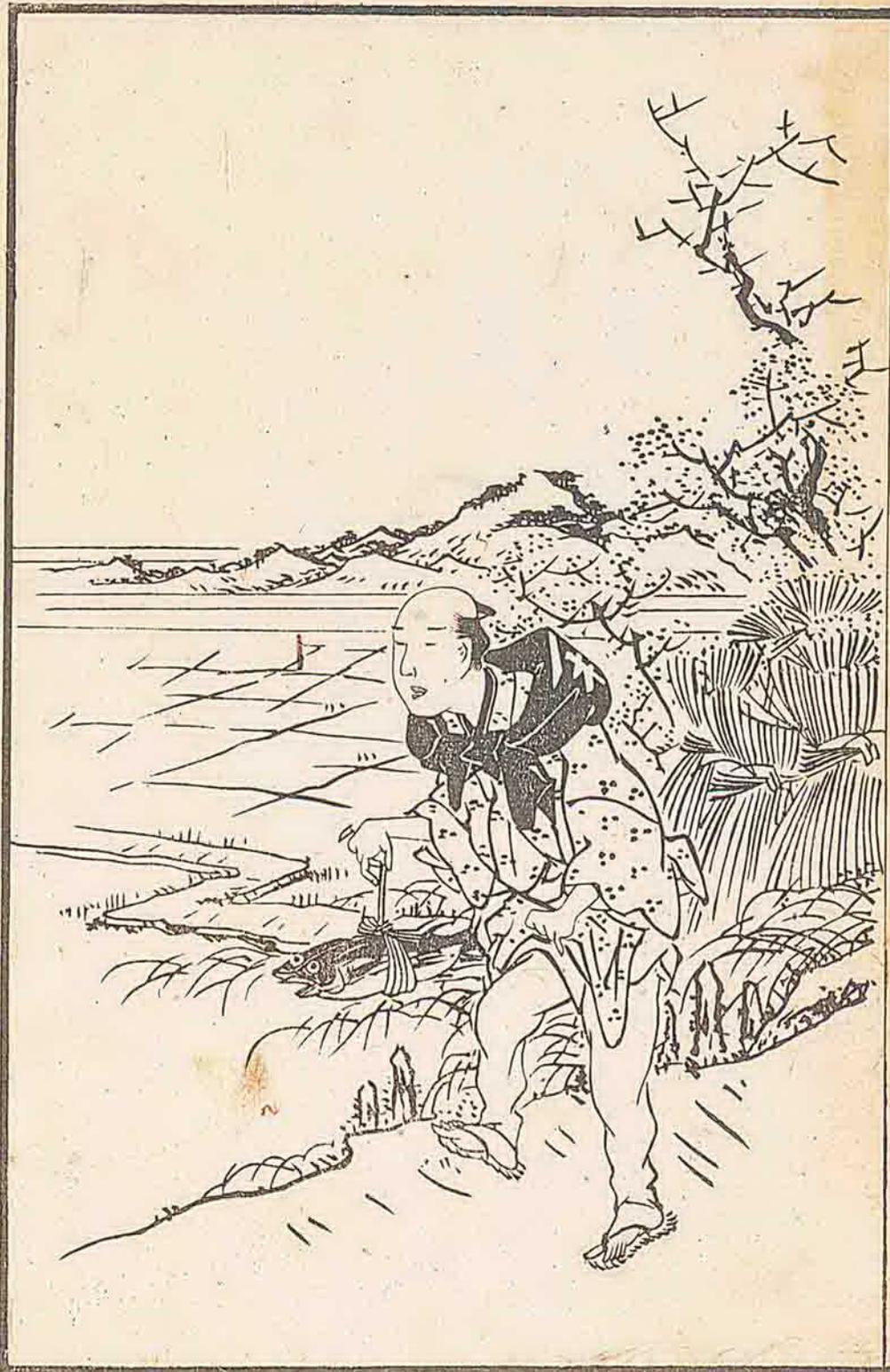
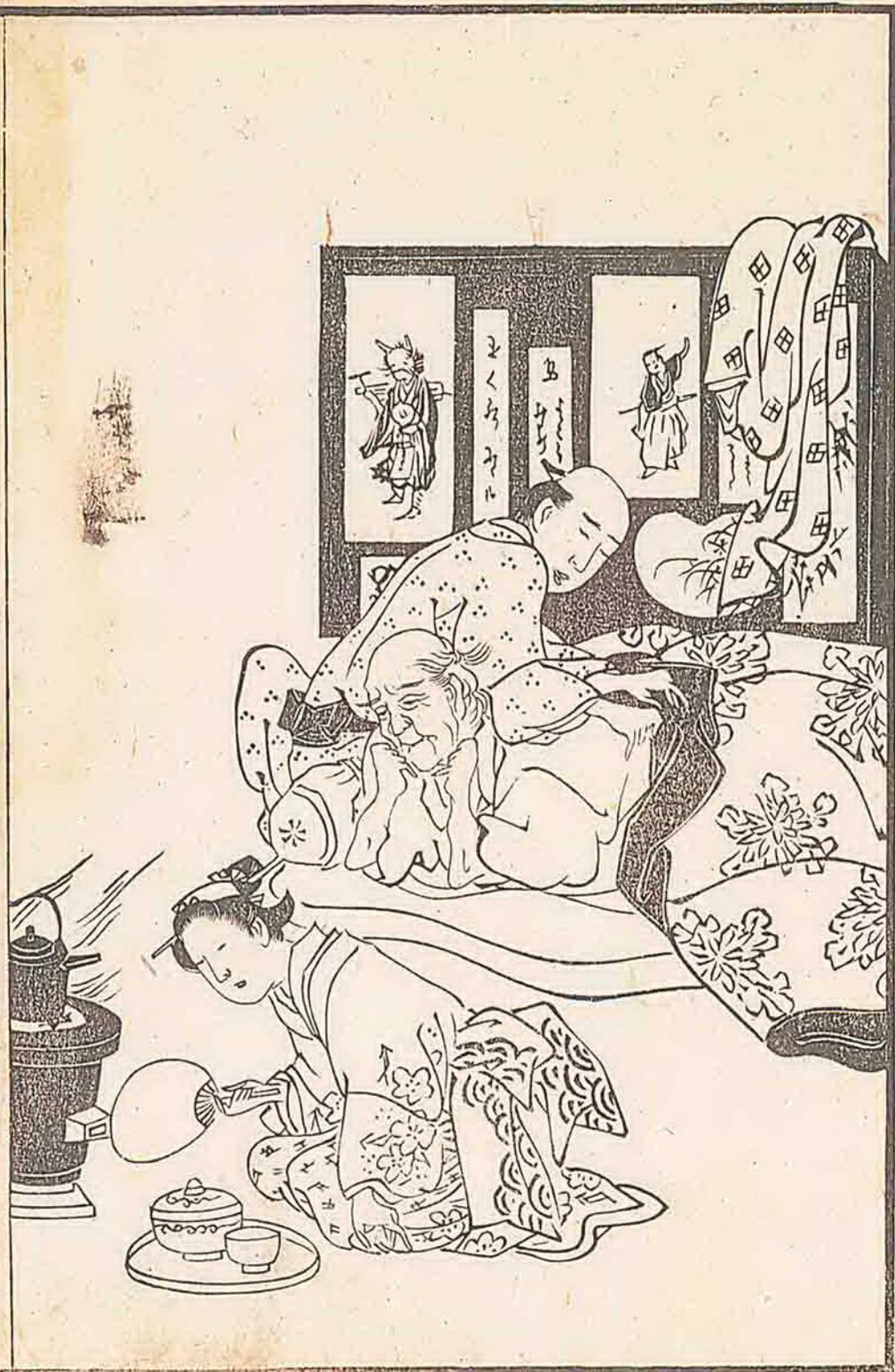
出来うの母のなりりいもよ候へば
 なうおひくるや奉公もは免れば父上乃
 るよふもあられんと在り候へば幸小川
 榎本何が一のそと年をかぎり候へば
 律義のてよろづつしめ侍輩中も
 何事をもかきふもはめやうに
 あるある人もあられもへおひて
 て清くけり候へば清く候へば
 病に志す病おとせしき候へば

清めごみのあまのりやれをそとくろの費入さひをよら
 こふくもあまのりやれをそとくろの費入さひをよら
 村乃くくよ昔侍よはよしい侍んとていやまび
 おもたきおつとめれが分なればと後(うしろ)のよら
 を款(かた)村長(むらぢやう)くく人(ひと)ちのきとたりたどく病(びやう)方(かた)たふ老(らう)
 父(ちち)の事(こと)を終(おひ)んどろよたのみ(のみ)並(なら)む村(むら)の人(ひと)も熱(あつ)ま
 米(こめ)ぐくろろがけのきまげは税(ぜい)事(こと)ふさほのせのなま
 子(こ)おまきぬる人(ひと)おと表(うら)な街(まち)つらよまこ子をさらて病(びやう)
 方(かた)のく人(ひと)貧(まい)さくくしやれど何(なに)もくといふこもれ誠(まこと)よ



うやま—やをなすつ—うれと御堂のくちらよりてハ叫ま
あ—まきげはや近き世のやまひり—く農工商乃ちらま
者ども牙一親主人の作をまらひぢやもまれば酒
高拵奥よかやそそそ務負車とれり止りをはご
る華ハ放逸す頼の徒とあり持ちたれふ田圃を賣
代あ—あ款—あつさ款をかけ親は又苦勞せさせ
その—ま—仕合が何—その歌がまらざるれとみうぢ
の—あま—會款ふもおとまらそまにあふ事どもたり
かゝる子供を—そそそ—ハ親のまらざる子供の子供の—

そり熱き唐の跡をうやみらやうりまのとおのあま
あつたまごてか—こふ熱き虫やなる者外ははつり—
虫をくるとが風邪のこらふまごひ日を経る病重り
醫師も熱い手をそけとくども志—ぬくて命
まてやわりのらん強よあ—この熱と消えけふ表に虫の
熱またここの病あま—床ふ—熱き虫これをはげ
そまをもてかかんあま—あひ主人—も熱ぢひてあ
あまかよひけを医師をたのめ業成し—免神や伝
まいの麻食を—まめれてかんごや—あこらるるのれ—



上ノ十

鷹若賞一のふ人乃子たるものそれありておとを
ざう免や

油屋庄右衛門下男七多傳

南所は油屋庄右衛門といふ商人ありその百仕は七多傳
といふ者あり出生る川越近在八王子の村百姓持左の
所ありかき前の庄右衛門十六歳の時抱られそを
より今の庄右衛門は事て實傳なるうまきこたれば
おなりのもろれとお内のふりて後がまあやのり
まろろれ者のことと仲者賣附は出情一丁つとあ

け子志あるに庄右衛門ふり頼むはき日を経ると終は
をうれく幾もなきおと人といふをいさぐ若輩たりれを
産業もやとお後く既小家行らむとせしうば
七多傳はだきのおまりを人の親類たりびよ友隣あり
まねきよせしやおと主人ははねのさそやといまご
若輩もろふおとをいさぐのうきひおろく一向けき
あやの世間おとをいさぐ下されは思ふ下さるべくもなき
立合のるれも挨拶はあうとていさぐれは七多傳
又ややい数年賣込い何さあひを休むとやけりる



上ノ十四

誰念^{だれ}もぞんどもあそれやめがれもや四十^{よそぢ}解^とりゆを
 あれまでの勤^{つと}方^{かた}少^{すく}く僕^{わが}がんと各^{おのづか}板^{いた}に推^おあふさるも
 け^{この}強^{つよ}を僕^{わが}はあご終^はにまうせたらあそれはふヶ年^{とし}のうら
 みをえ乃^のさるれ家^{いえ}小^こいし目^めふかけや登^{のぼ}りと
 言^{こと}架^かまぐしきしけるけち^{この}あはれあはれに威^{かん}
 立^{たち}合^あの危^{あや}おとこをせらうて何^{なに}がさこのうら
 えを^{この}あはれあはれに^{この}あはれあはれに
 ぬきけりおしも七^{しち}まぬおのれが路^{みち}金^{かね}をここのうら
 ち^ちはれも^{この}あはれあはれに^{この}あはれあはれに

主人の子供産之人のより男の子ありて江戸へ嫁よ
 けりや女子きき人 家ふさむら 産おのれも夜勤あや
 賣をらひて元金全と江戸同屋なびり當
 の借成跡金おも七多借自屋ちりまじりて
 紙子極免了きひそれとてやきり河きなひに
 元命をちげらち之年何夜となく 益やれく働
 うせざりきバ年紙金あつむを 経ふて合もいつ
 ち直りけちるま内方乃む免を日ふません
 志んにおよぶられバちなひ系とり 縁計の女職を

母親小うを 遊所乃婦人のかこ 多れみてなつりせ
 けらやちもまれば 持重るれとおろ七多求そのときハ
 目をむき物志るものしとそが中へ ねたれ
 小もせり 流るるを厚遊所の世語なす 江戸へ
 仲々奉公をつと免させけらがよ 流るるや 心あや
 七多求あ後まをれとおもひ人をとれ 娘の心より
 夢のわらひるるが 娘きんよく 流るる且ち 流るる人
 ちけるる七多求よ志るるまより ちかたの ちかた
 流るるといひるるの 物徳を七多求傳く 流るる

あを我牙はしくくつとすしをそんまなりし終らんまめし
るは生れつさやううに結ぶ束の子あきば父母りれみ
ぬく侍をしうばおりのこもあてを他人のそふつ
たまりんこもかこあぶらと昔あまを人の娘に對し
年比つてはくつとあかきとやううなる言葉もかけ
ざるを勿辨あきこれりけ事神より卯は我るを
知る人なりし衆ゆへにたると神を敬ふあてを
けあけるをきく人さても七き唐を思ふふこの人
う那しおもしろもめらなりき又女子も末は物入

そのやうとて年ぐよまきしはたくりもあはれ
かけ侍るしれり七き束が精カや年賦金ものさび
うへ今もてらるやとて母ももいれみたるあ
始末神も感應ありけるやこと一寶曆二
年申六月二日 政府より七き唐を石出され
て目お費文を下したるひてその忠誠を慶賞
し

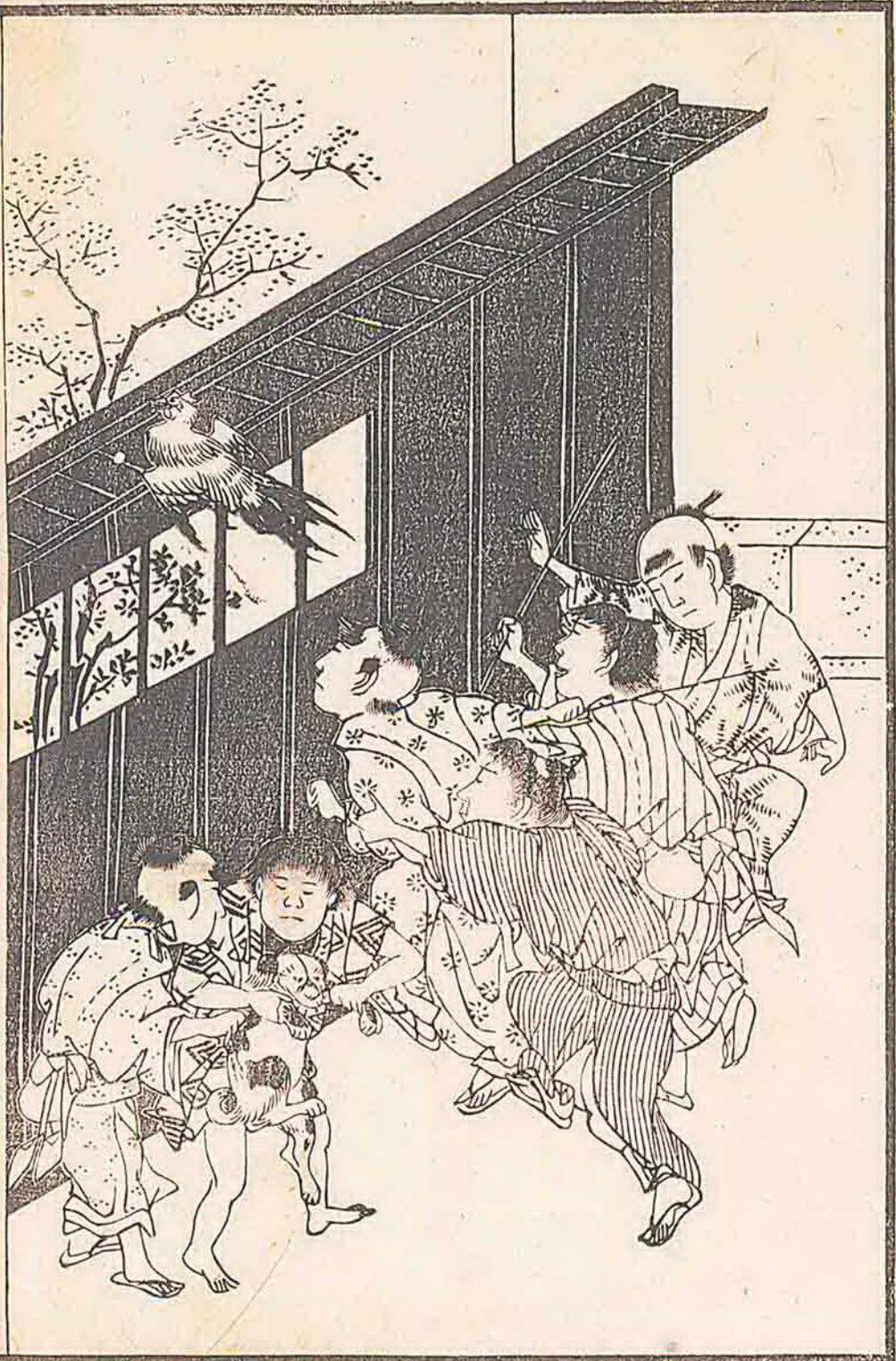
近江左半右出

川城南町よりしよりある近江左半右出

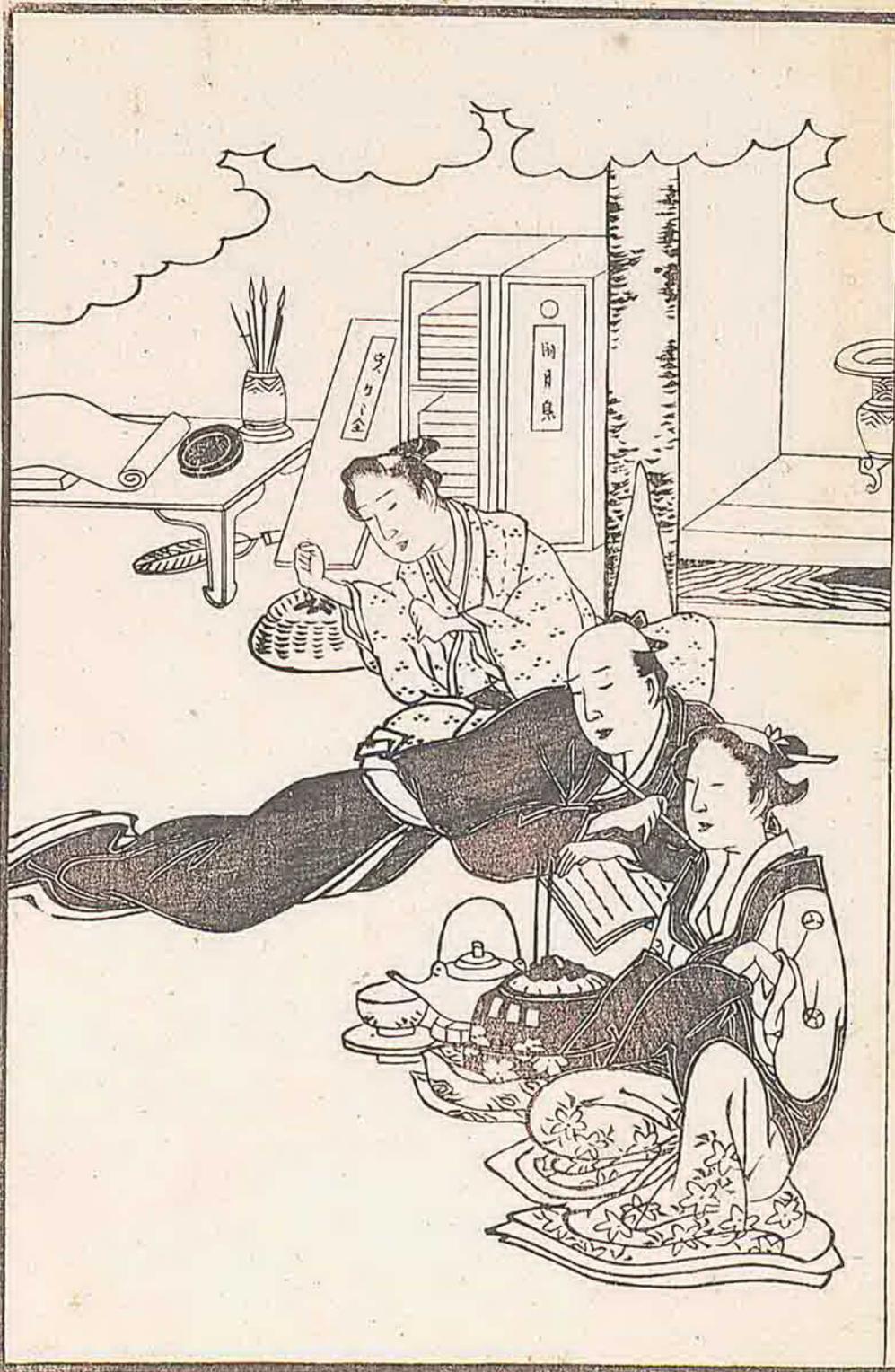
異服を何とあふ富家ありは右衛門父母は幸て
 孝やりりつゝとまゝかかれぬ中ぬればいれぬまゝ也
 母の小父母のまゝまゝをかくし是との處に父母の作せ
 りまゝがゆゑなりしとまゝに何はまれぬとある所
 見てはかぬが先父母も先は後とむたすふを
 とておのれををまゝに年を法として孝行
 して之れは保十二年
 政府よりめられて
 その孝を稱したまふそれ子幼名を長松やよ登り
 せられし事知るて父母のおとをに志こがひ葉子

何るひるゝごめのおよも是を命やまされ毒とやと
 かぞひろ路まゝはいしとまゝに女をむすび
 八景の流より拙学とまゝ師乃をゆかかひし海をてハ
 見せよ居て異彼もまゝ若者葉のまゝにまゝに
 かせしおれはまゝをまゝに命はむたまふに
 とあまぬらまゝもまゝに命をまゝに
 志後まゝのよかぬ業をまゝにまゝに志のび
 夢これまゝ免おのれハ父母の力かかひし命を
 とけしおひよりおれが父母あふし命をまゝに

さぞか— 孫^{まご}母^{はは}— へまりんと— 擧^あむざやどあぞ、あせを
 その親^{おや}— み 誓^{ちか}まふことあてて人乃おとよぶ登^{のぼ}くも
 かかりき十^{じゅう}之^の口^{くち}業^{わざ}れあろものまれむ子^こ習^{なら}ふの習^{なら}古^{ふる}を
 ぬまはせ父母のきげんたうかひ何^{なに}ぞ 傳^{たづ}せご— 何
 ればそれ事^{こと}— をま〜おこれひあそよも父母の命^{いのち}小^こ遠^{とほ}
 あ〜— 何^{なに}あれば見^み出^でて着^{ちか}ひ乃^のみりそな傳^{たづ}
 出^で入^いはらうぞ— 何^{なに}をいんぎんに洗^{せん}と先^ま見^み出^で乃
 若^{わか}者^{もの}子^こどもにり〜まご— 何^{なに}せんご傳^{たづ}みやう〜む
 つま— けきバ父母と長^{なが}松^{まつ}盛^{さか}へよま〜かひおや〜やう

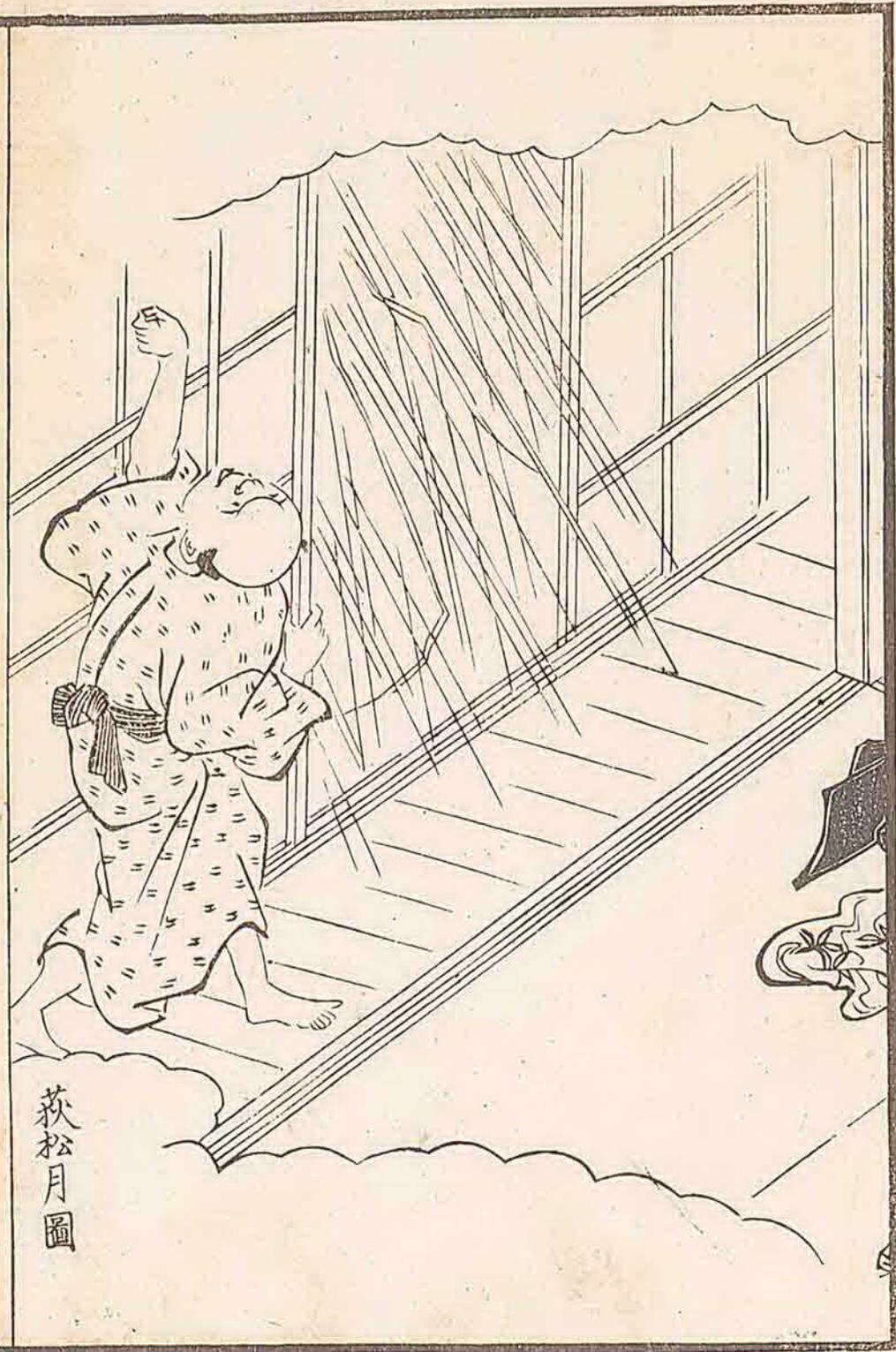


芝のほのたけはけり来たのきくよはなぐんをやせん
 けくろふ長松の妹あり名を清とよぶ父母あまよこ
 むき先と雲一たまひくふ松が分をり夜服飲食
 ひとよ話一外より何ぞ到来の品あきば母親まが清
 おつくりし給ふて長松ははくわも志のありけれど女子れ
 きりあるころよとけあがほいのかいを物をも入ぬあ
 やく心も母親これとよらん一松松このをくひ何き
 あまゝ母親のこまはばちおそれとあ一父親ハ内々み
 てその好めおきさよふしつた一けきば母親とにきん



よく見ゆる長松あんどのおとひとめかく河原とこ
と度くまて妹を弁へけうひまで長松のち終づひ
おとむくして長松たよりさるほどに年月つとて
長松幼くなまて一は中右衛門と名を改め同所北町と
いふ所の水村何某の娘を貰ひ妻とあり家成の儀を
うけ父を恒山と名を替別まかくれおとまうひ世に
のれてげり中右衛門妻もいふまうやうかすまれまて
乃かぞいりまはるさほと見たりひあこまをとて
父母の庵へ移りきだんをうかひ夕まを食ふりやと

手づく細味して父母のあはれよかなふやうにとりこ
ゆりき常は父母れ食事を夫婦まてうらうかまを
あも下給あふおつとびかおひあんとよく飲食
たまふをえてるおよあうよ終るじ父母のこらよかおぬ
るれどもまていよてもいと嘆きまて又たなぬ暴風大雨
あどれ節を深更とりどもまゆもに庵へまを移ん
て後まといまひせまうの三伏の隻うたれが母あ人
雷哉あらにおそれまうもおろくと音のまこゆ
押入戸板のうらまかろき中右衛門夫婦欠つけ見せより



萩松月圖



上ノ二十一

若者ゆふ人づゝ糸里香をたき鳴神のちがまゝまで伽を
あしけるは右はつ帯は夜いたるちぬのちと形音の程
を父の肩腰あどなぐさしりたつゝせれ中のをりして
ぢぢぢぢぢ又あゝ唐土倭の古事あんど物結ねむまの
いゝあまのちをゆまゝい結ゆゝい結ばあまゆりける
時およりてお父の傍におうたお徳あどまて兼父ぬれが
笑のみささうみぬあこゝろど父くちを志つたりしを
たつゝいの下あど兄あれぬ事のおよて叫き笑ひくも
むべあるれ父を稚子れごゝちのひ孝子ハ童のちの結ぶりする

上ノ下ニ

さ偏あそりかつて何ゝこまるあゝあゝ是れあん父母一親
愛敬の至るといせんうまは孝子あまゝ何りといひやも
け人乃ちよきらん人を末弟もおよむびおまゝ父直山
素より痔の痛まで冬のはるをさめてわくはるみにもえ
かぬるを中右あつるに志れが兼業を用ひ附業も
よて療治もといひ治せび只肛門を何ゝめ脱肛が
おさまればそのまゝいひみもさるなり孝子さかると考へ
そのうち痛むせつち已がはまで臭を吹け何ゝちあぢ
まじばあちよしとちんゆゝしうばあさあおかち脱肛を

は子ゆくみりてち音よておしりき体りしつが交り
そとそとをのづれて父上も辨ふと後とび宣ひけるを
穰乃場のむさと後しきを母ゆく名るるり親子たれ
ばとて勿神あり以來をそ用ふめされよとありけれバ
半右清つらあづてていよとそれしりとも脱肛おさま
らざまじばはよみくみ療治しける是よてりてこの難後
をのぞきくるさるはよ今申のし三月末はう
恒山文母半右清つが書に戸一との指まできくそと村きの
新しらのぞく白子のちよりてとちりて体りしち恒山

係よやまのちを祀されくきを早花神ま川裁一志せ
ける半右清つけよしやとやとわとらがりおどらりまを
取ものもさるちかちりし出白子にりて父上をそれバ
は抱りしびてちりて正すもなるといひては
これあるん中風の病なるを急角し川裁一はれ
きくを醫療ふを急し仁神おいのりて後れ限り
養生とてしどもちりてはく後る卯月中の九日とら
わり矢又けあ半右清つが婦あざき悲しみとてあす
かぎやわしとてしども母のなりひせんまをまれく葬の

心々々々ぬんご後よりおこあひけらそれとやると 返善
 借書おこさるびあさる 脚前小香を煙ゆべと
 雲伏をそあて念佛一足ゆせるあさくはのくか
 半右衛門積年の至孝を挙て祿位々々まばその何
 まを町の役人よき 政府子孫へ出ければ
 君勝子遊一二代の孝を感せるとたまひ 越お給お抱
 を賜りてりつ々それ孝徳を賞せると 于時寶曆二
 年申六月二日のあつた

政府子孫へ出ければ



論

或人問孝子家富後者も如く何れ是ら
あるかと言ふに孝は孝をこれほどのけいめをせ
ざらんう何あぢらよ愛敬の至るは心うんぞこの
人乃亦小者ん人も言へり善く愛敬バ
うやまひ思ふに教へば愛敬たるに愛敬ちて
たもくも言ふにうやまひ思ふに愛敬たるに
まど愛敬小似てかたやうやまひたうざるに
似て思ふに言へり人あらんはうに愛敬の至り

なむびや又孝子陰徳乃あはれふにそのを
とらぬををわく宝厝み年のころ夫婦の
者喪居れ位およて在るがまに孝事
いふ言ふをわく妻産をせに男子うまれ
血治らばして善くえうれくせよなりおも
うまき子も息女ありて善くやれく妻の指小
入る言ふに言ふに言ふに言ふに言ふに言ふに
ありその教たる人小貴ひけ連するも里子に
はらう言ふに言ふに言ふに言ふに言ふに言ふに

新田といふ所はあづき育てんといふ人あり
これに早々の村へつづけて七歩までをだて
八歩の甚百姓乃所へ書子につづりける
又そは板系町といふ所は駕籠をかきせしむ
けいとせる者をも傷寒をまづひあやむれ
る甚しき妻あるものもおれど病はなやむ
なるむとめを人のこと湯茶食ふ所のせ
まも人もなり隣近所の人もやまひおそれ
ちづづく者もなりかゝる甚きものよは右田つ

さうはくおとひもれやく天北人の靈物見
殺しよちたははとがそり小医師をたのみ
つづり外に老女を雇ひ茶食事ホ介抱つ
しそれより日をおさふとそり食ふのそり
および十日ほど経て全く平愈しとす
又或いふ人極端なことをして知者
ぬ方令鳥目白米やどその家へおそりに
鏡戸をあけそとそり投込てゆりさうく自分
の名をかきつづりかきけら粗帯れり

なりとぞ報^ひふげとば 悔^まる累^つも

恒山^{つねざん}代^よより 文政^{ぶんせい}元^{げん}年^{ねん}今^{いま}の 中^な右^{みぎ}弟^{あに}つまで 五^ご代^{だい}

あや 新^{あたら}ち百^{ひゃく}とせよ およむむうふかろくび 吳^ご

服^う商^{しょう}内^{ない}をいぬぬあやこい 殊^{また}は二^{ふた}代^{だい}の 孝^{こう}徳^{とく}且^{かつ}

陰^{えん}徳^{とく}の 心^{こころ}らどるれなる 身^み一^{いつ} 母^{はは}のくこいをおひ

武州川越善行録卷上終

トヨ跡

上ノ二十七終

